

I 研究の概要

外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究

研究主題

進んで自分の思いや考えを伝え合う児童の育成

～外国語活動と国語科の授業づくりを通して～

1 主題設定の理由

社会が急激に変化し、様々な面でグローバル化が進んでいる。そして、国内でも外国語でコミュニケーションを図る機会が増えてきている。本校の児童の生活においても、テレビやインターネットを通して、外国語に接する機会が増し、外国語に対する抵抗感が薄らいできている。国際化・情報化など変化の激しい渦中にいる子どもたちが21世紀を生きていくためには、外国語でコミュニケーションをとる能力が強く求められている。

教育現場においても、国際学力調査における子どもの読解力低下という問題や、不登校・いじめ等人とのコミュニケーションにおける現代の子どもたちがかかえる問題は、今もなお山積みされている。言葉の力を高めつつ、自他の違いを認め、多くの人とかかわり合いをもつためにコミュニケーション能力を高めていくことが求められている。

平成23年度から全面実施される学習指導要領外国語活動の目標には、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と示されている。小学校の外国語活動では、外国語のスキル（技能）面の向上を図ることではなく、言語や文化について体験的に理解を深め、「聞く・話す」の言語活動を中心として、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に焦点が当てられていることがわかる。「聞く・話す」ことを中心に学習活動を展開することは、昨年度からの本校の研究主題『進んで自分の思いや考えを伝え合う児童の育成』とも一致してくる。コミュニケーション能力は外国語活動のみで身につくものではないといわれ、他の教科、特に母国語である国語と積極的に結びつけて育成していく必要がある。そこで、外国語活動と国語科とを積極的に結びつけ、日本語とは異なる言語や文化にふれることにより、言語の面白さや豊かさ等に気づかせ、言語に対する関心を高め、コミュニケーションを図ろうとする態度を育成することは、国語力の向上にもつながると考えられる。つまり、外国語活動と国語科において、児童をいかに意欲的に学習活動に参加させ、コミュニケーションへの関心・意欲を高めるかが大きな課題であり、そこに焦点を当てて研究を進めていかなければならないと考えた。

また、相手を思いやる豊かな心情を育むことも大切であり、道徳や他の領域とも関連づけながら総合的に育成していく必要もある。

そこで、豊かな人間関係の中で友だちと積極的に関わる体験を通し、楽しくコミュニケーションをとりながら、進んで自分の思いや考えを伝え合う児童を育成することが大切と考え、本研究主題を設定した。

2 研究の構想

(1) 研究目標とその視点および基盤

主題設定の理由を踏まえ、本校で取り組む初年度の研究目標と視点、基盤を以下のように定めた。

研究目標

楽しみながら人とのかかわる体験的な学習活動を取り入れることで、
積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する

①目標にせまるための視点

ア 自然に楽しめて、必然性を意識した学習活動の工夫

- ・変化があつて、意味のある繰り返しを取り入れた学習活動
- ・必然性を意識した学習活動
- ・聞くことを大切にした学習活動

イ 英語ノートや教材教具の効果的な活用方法の探求

- ・児童の実態に即した英語ノートの効果的な活用
- ・教材教具の工夫と改良
- ・ICTを利用した効果的な指導方法の工夫

ウ 児童の関心・意欲を高めるための効果的な評価方法

- ・児童による自己評価、相互評価
- ・教師による行動観察、発表観察
- ・一単位時間内および長期的な授業観察・記録

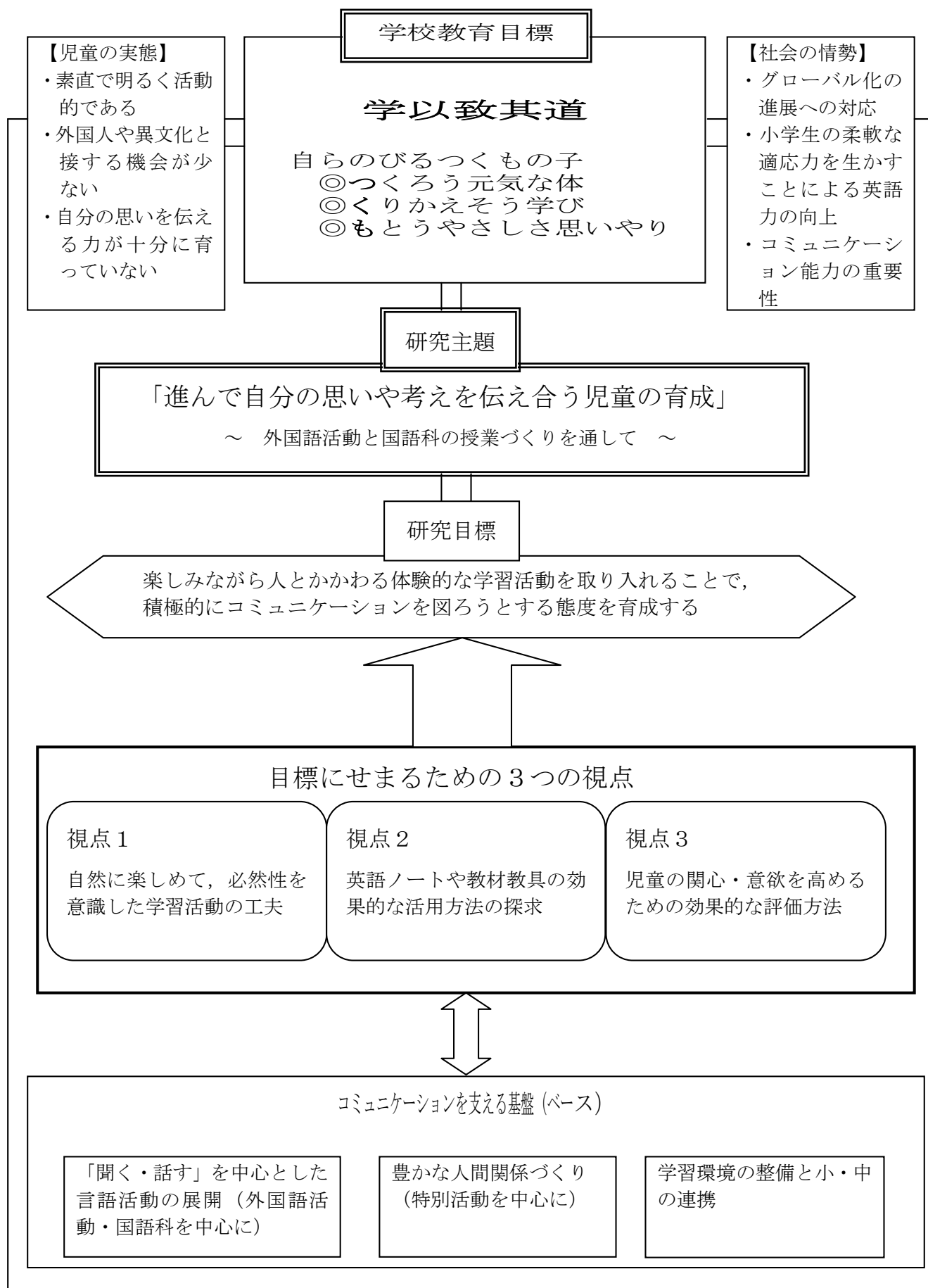
②コミュニケーションを支える基盤（ベース）

ア「聞く・話す」を中心とした言語活動の展開（外国語活動および国語科の授業を中心に）

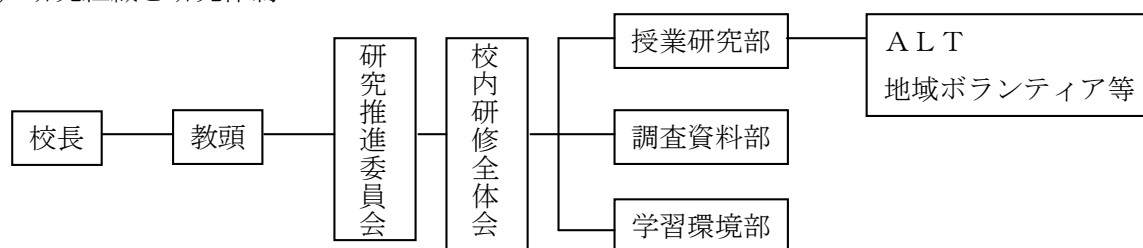
イ 豊かな人間関係づくり（特別活動を中心に）

ウ 学習環境の整備と小・中の連携

(2) 研究の構想図



(3) 研究組織と研究体制



授業研究部	調査資料部	学習環境部
・指導法の工夫・改善 ・指導案の工夫・改善 ・ALTとの授業づくりの工夫 ・学担だけで進める外国語活動の授業づくりの探求 ・評価方法の検討	・教材の作成 ・教材の整理・保存 ・アンケートの実施・分析 ・情報発信（HP，英語だより）	・外国語活動室の整備 ・校内掲示の工夫 ・校内放送の活用 ・集会活動の工夫
構成員（◎はリーダー）	構成員（◎はリーダー）	構成員（◎はリーダー）
◎ 3名+ALT 2名	◎ 4名	◎ 5名
会議場所	会議場所	会議場所
外国語活動室	校長室	視聴覚室

①研究推進委員会 毎月第1木曜日

②各部会 毎月第2木曜日

③校内研修全体会 水曜日（研修計画による）

ア 事前研 イ 授業整理会 ウ 外国語活動研修会 エ 模擬授業

④ALT との打ち合わせ（火曜日の2限目と放課後）

⑤集会活動・校内放送（国際理解）

Ⅱ 研究の実際

1 指導の実際

楽しみながら人とかかわる体験的な学習活動を取り入れることで、
積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する

① 目標にせまるための視点について

ア 自然に楽しめて、必然性を意識した学習活動の工夫

◎変化があつて、意味のある繰り返しを取り入れた学習活動

- ・絵カードを見せながら、単なる説明や単調な繰り返しにならないように気をつけてきた。チャンツでもリズムに合わせて発声するだけではなく、手拍子を付け加えたり、ジェスチャーを交えたりしながら音声に慣れ親しませるために変化を持たせた。
- ・児童に「自分にもできそうだ」と思わせ安心して学習活動に取り組ませるため、チャンツやゲームなどはなじみのある単語を中心に扱ってきた。その中で、順序を入れ替えたりリズムを変えたりしながら、無理なく取り組めるような内容を取り入れてきた。



＜Ten steps のチャンツの様子＞

◎必然性を意識した学習活動

- ・児童はゲームが大好きである。キーワードゲームやスワットゲームなど素早さを競うゲームや、カード集めゲーム、スネーク・アンド・ラダースのように勝敗を競うゲームは特に盛り上がった。ただし、ゲームが児童にとって「fun」ではなく、「interesting」になるよう気をつけてきた。ゲームをしながら新出表現に慣れることや、積極的にコミュニケーションを図ることなど、授業のねらいを見失うことなく活動を構成することが大切である。
- ・他者とコミュニケーションを図る必然性を取り入れるため「道案内ゲーム」「買い物ゲーム」などの体験的なアクティビティを取り入れてきた。学習形態もペアで、グループで、全体でなどコミュニケーションのねらいに合わせて工夫した。



＜児童が大好きなキーワードゲーム＞



＜買い物ゲームをする5年生＞

◎聞くことを大切に学習活動

- ・ 小学校の外国語活動では言語の習得を目指しているのではないので、「聞く」「話す」に焦点を当てて指導をしてきた。特に「聞く」ことを大切するために、単元で扱う英語表現を取り入れたチャンツや、ALTが発音した色と同じ色のものを探すカラー・タッチ・ゲーム、児童数名が一斉に月を言い、誰が何月を言ったか当てるステレオ・ゲームなどを学習活動に取り入れた。英語を聞き、音声や表現に慣れさせることで英語に対する難しさや不安な気持ちを取り除いて、自分も英語を使って表現してみようという気持ちを引き出してきた。

- ・ HRTとALTによるデモンストレーションの場面で、外国語でのやりとりを十分聞かせることで、児童の「自分もやってみたい」「できそうだ」「話したい」という意欲を高めてきた。HRTは学習モデルとしての役割を忘れず、自らが失敗したり困ったりする場面も見せながら、児童には少しでも相手に伝えようとするのが大切だということを意識させてきた。また、大きな声とジェスチャーを使い豊かな表情でコミュニケーションをする楽しさも大切にして指導してきた。



<ALTと会話をしている様子>

イ 英語ノートや教材教具の効果的な活用方法の探求

◎児童の実態に即した英語ノートの効果的な活用

- ・ 本校では、昨年度まで、1・2年生は教育課程外で外国語活動を、3・4年生は総合的な学習の時間で国際理解のための外国語活動を行ってきた。現5・6年生は昨年までの段階で、英語に慣れ親しんでいるため、英語ノート1の学習を5年生で、英語ノート2の学習を6年生で指導していくこととした。
- ・ 今年度は児童の実態をもとに、英語ノートの単元配列を生かしながら外国語活動を行ってきた。今年度の研究目標にせまるため、積極的にコミュニケーションを図るアクティビティや、聞くことを大切にゲームなどを多く取り入れてきた。
- ・ 6年生が英語ノート2の学習を進めていく中で、扱う英語表現が児童にとって全く初めてであり、聞き慣れていないと判断したときには、英語ノート1の学習を取り入れた。
- ・ 英語ノートの使い方として、



<ペアで練習 自己紹介をしよう>

- ① いわゆるノートとして文字や線・色塗りなどの書き込みを行う
- ② 国際理解のための資料として使う
- ③ インタビューゲーム（情報収集）やショウ・アンド・テル（発表活動）など記入・提示のワークシートとして使う
- ④ スクリーンに映し出したデジタル教材を使い、視覚・聴覚を一点に集中して使う

など、児童の実態・学習内容・学習過程に合わせて使用してきた。

- ・一単位時間内に児童が英語ノートに書き込みを行い、その後、ゲームやアクティビティへと学習を展開する場合がある。普通教室ではアクティビティに移る際、机や椅子の配置換えに時間を要してしまい活動の流れが止まってしまうことが予想された。容易にスペースづくりを行うことができるよう外国語活動室を特設し、短時間で配置換えができるようにしてきた。

◎教材教具の工夫と改良

- ・外国語活動では、実物を用いたり絵カードや音声CDなど視聴覚教材を用いたりすることが多い。本校では基本的に英語ノート付属のデジタル教材を利用して学習活動を構成してきた。絵カード等はデジタル教材に収められているものをダウンロードして使ってきた。
- ・児童が英語ノート付属の音声CDのスピードについていけない児童もいたので、開隆堂から出された「英語ノート ゆっくり音声CD（カラオケ入り）」を購入し活用した。



<「ゆっくり音声CD」>

◎ICTを利用した効果的な指導方法の工夫

- ・英語ノート付属のデジタル教材を積極的に活用してきた。特に、チャンツでは音声とともに動画が写されるので児童がイメージしやすく効果的であった。また、韓国や中国・ブラジルやフランスなど英語圏以外の言語や文化を体験的に理解する際には、ネイティブな音声でその国のあいさつを聞くことができたので大変役立った。ALTとのTTが組めないときでも活用できる内容になっていることが分かった。



<世界の「こんにちは」を知ろう>



<日本の行事や特徴から月の言い方を知る>

ウ 児童の関心・意欲を高めるための効果的な評価方法

◎児童による自己評価、相互評価

- ・毎時間「振り返り」の場面を設け、振り返りカードをもとに児童が自己評価する場面を作ってきた。振り返りカードで個々の意欲の高さを把握し授業改善に役立ててきた。また、ときには相互評価を取り入れ、活動を終えた児童が達成感や成就感、失敗したことや不安だったことを伝え合う場面を設けてきた。

ワークシート点検・英語ノート点検などの活動を通してのみとりを行うとともに、記録を蓄積し評価してきた。

② コミュニケーションを支える基盤（ベース）について

ア 「聞く・話す」を中心とした言語活動の展開（外国語活動および国語科の授業を中心に）

「伝え合う」ということは、自分と自分を取りまく友だち、つまり伝えようとする相手を意識した双方向の授受である。「聞く・話す」を中心とした言語活動を行う点では、母国語である国語科も関連深いと考えた。国語科においても、意図的にペアやグループ学習の場面を設け授業構成をしていくことで、相手とかかわり合い、互いに思いや考えを伝え合うコミュニケーション能力が育つと考え、実践を行ってきた。



＜グループでの話し合いの様子＞



＜話し合いでまとまったことを発表する児童＞

目標にせまるための国語科の授業づくりについて

進んで自分の思いや考えを伝え合う = 積極的にコミュニケーションを図ろうとする

（国語は能力として身に付けさせる） （外国語活動は態度として身に付けさせる）

国語科における「かかわり合いを生むための学習形態」（1年生から6年生まで共通）

一人 → ペア（グループ） → 全体



学習過程の工夫（レベル1～レベル3）

	レベル1	レベル2	レベル3
段階	考える（考えをもつ）	尋ねる（深める）	決定する（広げる）
具体的な姿	自分の思いや考えを相手に伝える。相手の思いや考えを聞く。 （伝達的なペア学習）	相手の思いや考えを理解した上で、質問をしたり、反論をしたりして話をつなげる。 （双方向のペア学習）	交流し、最終的な自分の思いや考えを持つ。 （自己決定・自己選択のペア学習）

イ 豊かな人間関係づくり（特別活動を中心に）

コミュニケーション能力を育成するには人間関係づくりが大切である。豊かな人間関係がよりよいコミュニケーションを生むと考えた。そこで、特別活動を中心とした体験的な活動において、多様なものの見方・考え方や、相手との違いを知り認め合うことを体験させることで、友だちと共に学ぶ大切さや楽しさが実感できるように取り組みを行ってきた。



＜1年生 人間関係づくりの授業実践＞



＜児童集会での様子＞

今年度は特別活動を中心に実践を行ってきた。学級活動では、各学級が学期に1回、構成的グループエンカウンターの手法やアサーション・スキル・トレーニングの手法を用いて「人間関係づくり」の授業実践を行いコミュニケーション能力の育成を図った。

また、児童会活動では、代表委員会が「英語集会」を行った。代表委員がデモンストレーションを行ったあと、全校で Head and shoulders をジェスチャー付きで歌い、伝達ゲームを行った。全学年で同じ時間を共有し楽しい時間を過ごすことができた。

ウ 学習環境の整備と小・中の連携

教室掲示や校内掲示を利用して児童が自然に外国語に触れることができる学習環境を整備してきた。児童の興味・関心や学習内容に合わせ掲示物を交換したり、外国語で書かれた絵本を紹介し貸し出しをしたりした。



＜全校児童の誕生日が貼られた掲示板＞



＜英語の絵本の貸し出し＞

小・中の連携も大切にしたいと考えた。お互いに授業参観をする機会を設け意見交換を図ることを計画した。また、中学1年生を対象に意識アンケート調査を実施し、小学校外国語活動を行う上で有効だったことや改善を行うべきことを分析してきた。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 児童の実態に応じた学習過程を工夫したことによって、児童の関心・意欲が高まった

学習活動が「自然な流れであるか」「英語を使ってみようとする必然性があるか」など児童の興味・関心や実態に合わせた学習過程や英語ノートの活用の仕方を工夫した。その結果、児童全員が活動に参加するようになり、外国語活動に対する児童の関心・意欲が高まってきた。7月に行った児童アンケートでも「外国語活動は楽しかったですか。」の項目で、「とても楽しかった」「まあまあ楽しかった」と答えた児童の割合が5年生は88%、6年生は82%となった。

(2) 児童が聞きたくなる学習活動を工夫したことによって、「聞く力」が育まれた

扱う英語表現や単語を単に増やすのではなく、同じ表現や単語を使って違うゲームやアクティビティをたくさん取り入れ、児童の興味・関心を高めながら学習活動を展開してきた。いろいろな場面で、何度も聞いたり話したりしたことで、児童は自信をもってコミュニケーションを楽しもうとするようになり、それと同時に児童の「聞く力」が育ってきた。

(3) 単調な繰り返しを避け、活動を工夫したことによって、児童が外国語活動に興味・関心を持つようになった

単元で扱う英語表現や単語を無理に覚えさせようと単調な繰り返しを行えば行うほど、児童は知識・理解を求められるように感じ、英語が難しいと感じたり、外国語活動の時間が嫌いだという思いが強まったりする。同じ英語表現でも、チャンツを言ったり、ゲームの中に扱ったり、必然性のあるアクティビティの中に取り入れたりしてきたことで児童の興味・関心が高まってきた。

(4) 少しでも相手に伝わればいいことを認めたことによって、児童がよりコミュニケーションをとろうとするようになった

英語に触れ、英語に慣れ親しむために、まずはコミュニケーションに興味をもたせることが大切である。ただたどしい英語表現でも、そこにジェスチャーを付けたり、絵で描き表したりして自分の思いや考えを相手に伝えることができればいいことを常に話しかけてきた。少しでも相手に伝わる体験をしたことで、児童は自信を持ち、次はもっと豊かな表現で伝えようと、より積極的にコミュニケーションを図ろうとするようになってきた。

(5) 肯定的評価に心がけたことによって、児童は不安を感じなくなった

A L Tは授業中いつも笑顔を絶やさずに児童の伝えたい思いを受け止めている。H R Tもそれを見習い、児童一人ひとりの性格や行動を理解し、授業を構成していくように努めてきた。H R TとA L Tが、常に笑顔で児童に接し肯定的に評価しようとしてきたため、児童は不安を感じることが減り、コミュニケーションを少しずつ楽しみむようになってきた。

(6) 「聞く・話す」を主体とした国語科の授業づくりをしたことによって、話すことに抵抗がなくなった

国語科の授業において、児童をいかに意欲的に学習活動に参加させ、コミュニケーションへの関心・意欲を高めさせるかに重点を置いて授業実践を行った。より身近なコミュニケーションを取り入れた学習過程としてペア学習やグループ学習を取り入れた。多様な考えや意見の相違が生まれるような学習課題の与え方や発問を教師が意図的に行うことにより、児童の話し合いが活発になってきた。

その他に、「言葉」「笑顔」「心」の3つのキーワードでの人間関係づくり、学習環境の整備による児童の活動意欲の向上などの成果があった。

2 今後の課題

(1) 指導計画を見直す

英語ノート1と英語ノート2では、学習内容の難度差が大きいことがわかった。特に6年生の2学期からの学習内容はそれまでのレッスンに比べて扱う英語表現が増し、「聞く」ことを中心とした活動だけではコミュニケーションを図る段階にはなかなか達しないことも予想される。どのような手だてをとって、基本的な英語表現に慣れ親しませていくか、英語ノートの活用を中心としながらも、児童の実態に合うように指導計画の見直しをしていかなければならない。

(2) 双方向で話し合うよさが実感できる学習活動を創る

コミュニケーションは自分の思いや考えを相手に投げかけて、相手もそれを受け取り、自分の思いや考えを再び相手に投げ返すキャッチボールのようなものである。1学期の現状は、キャッチボールをするための道具を揃えたり、教師が投げ方を教えたりしている段階であった。そして、今、相手のボールをキャッチする方法がわかり、これからようやくキャッチボールが始まろうとしている段階であると考えられる。しかし、いくら投げ方や取り方がわかったからといって、伝えたいことや伝えたい思いがないとキャッチボールは始まらない。自然にキャッチボールを楽しむことができる学習活動、しかもキャッチボールしたくなる必然性を意識した学習活動を創り出していかなければならない。

(3) 興味・関心を高めるための授業に改善する

外国語活動の目標の中にある「言語や文化に対する体験的な理解」に関しては、教材研究が十分にできず英語ノートの内容をそのまま利用することが多かった。児童の実態に合わせ、またALTと意見交流をしながら、コミュニケーション能力の素地を養うために、児童の興味・関心や知的好奇心を高める授業を工夫改善していかなければならない。

その他に、効果的な評価方法、担任だけで行う外国語活動の授業づくり、中学校との連携、地域人材の発掘など多くの課題がある。今後は、校内の研修体制、研修内容の見直しを図り、更に研究を深めていきたい。